

懐旧松本城

田村修三



ふるさとを離れた任地から久しぶりに列車で帰って来た頃のこと、善知鳥トンネルを出て塩尻駅が近くなると空が急に広がったように思っただものである。「やっぱり松本平はいいなあ」と同行の友と帰郷の感慨に浸ったことが思い出される。

松本駅に近づく、車窓から見える松本城はすだれに覆われていた。誰かが「改築工事が始まっているんだよね」と言っていたことが思い出される。あれからもう50年余の月日が過ぎ去った。

市の東山部に生まれ育った私は「町へ行く」と言っても鍛冶町から東町、そして縄手・中町・深志公園あたりまででお城まで行った記憶は皆無で学校の遠足でもなかった。でも義民中萱加助の怒りによって城が傾いた話は聞いたことがあった。

長じて旧市内の学校へ通うようになると学友が 朝お堀でスケートをしてきた話を聞いたり、放課後一緒にお城の広場で野球試合を見に行こうよと誘われて行ったこともあった。その時であったかは定かでないが、お堀の端の苔むした石垣の中ほどに黒いマントを着た三々四人の松高生が佇んでいた姿がいまだに脳裏に残っている。そしていつの間にか松本城は私のふるりの代名詞となってしまう。

昭和の大修理により美しく立派な容姿となった国宝松本城は私たち市民の宝であり誇りでもある。先日報じられた小中学生のお城の床磨き、古城会の方々をはじめ地域ボランティアの活動等と「外堀復元の夢」などの記事を読むとき市民の一人としてお城によせる思いが熱くなる